

ボール運動に苦手意識を持つ児童に配慮した教材提案

—「ゆるスポーツ」に着目して—

小林杏(宮城教育大学)

1. 目的

本研究は「ゆるスポーツ」に着目し、「運動が苦手な児童」や「運動に意欲的でない児童」も楽しめるハンドボール教材を提案することを目的とする。

2. 研究方法

- 1) ハンドボールの戦術、ハンドボールの授業における課題の対応策、ゆるスポーツのコンセプトを取り入れたハンドボール教材を提案する。
- 2) M大学の学生を対象に教材の実践を行う。「パラレルカットインプレー」「ポストプレー」などの動き方の説明、練習、作戦タイムの後、4対4のゲームを2回行った。
- 3) ゆるスポーツ協会の萩原拓也氏とリモートでの検討の機会を設け、そこで出された改善点等を踏まえて再提案をする。

3. 教材提案

ハンドボールの独自の戦術や授業における課題を踏まえ、「ディフェンス(以下「DF」とする)とDFの間」「パスカットされない位置」「得点しやすい場所」が明示的で、「意思決定」(岩田, 2012)の複雑さが軽減されたコートを提案した。

図1のように「DFゾーン」「シュートゾーン」を設けた、花形のコートをつくった。「DFゾーン」の間の隙間は、得点につながる重要なエリアであり、ハンドボールの独自の戦術である「DFとDFの間を攻める動き」を誘発するコートになっている。

また、ゆるスポーツに着目し次のようなストーリーやルールを設定した。

- 1) 「DFゾーン→花びらゾーン」「シュートゾーン→花の蜜ゾーン」「プレイヤー→ミツバチ」「ボール→花粉」「ゴール→めしべ」「シュートが決まる→受粉」。(「ミツバチが受粉させた数を競い合っている」というストーリーの設定)
- 2) シュートが決まったらチームで集まって「受粉!」とコール。
- 3) 不織布でつくった「羽」を広げて守備。
- 4) チーム合計点=得点×シュートを決めた人数。

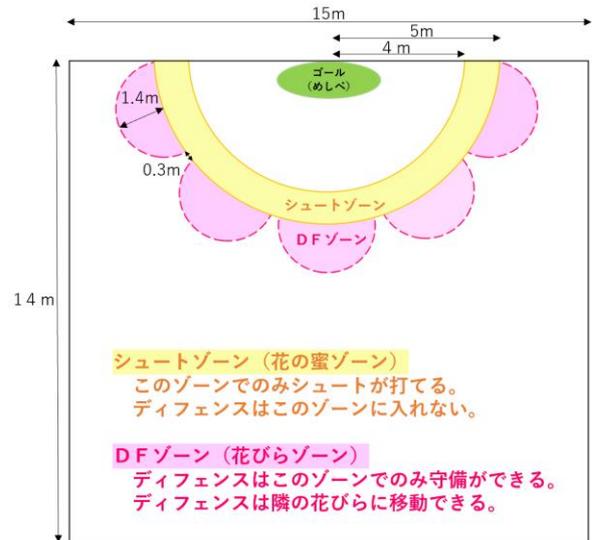


図1 花形コート

4. 実践の結果

ハンドボール初心者だけのチームもパラレルカットインプレーやポストプレーを何度も決めていた。「受粉コール」や「羽」によってゆるさが生まれ、度々笑い声が聞こえてきた。「チーム合計点=得点×シュートを決めた人数」というルールも、全員が活躍できるようにするために効果的であった。

5. リモート検討会

萩原氏からのアドバイスを受け、シュートの難易度によって配点が高くなるルールや、ハンドボールの7mスローに代わる、「5mスロー」を新たに取入れた。また、教材名は「ハニーハンドボール」(通称「ハニーハンド」)に命名した。

6. 結論

実践の結果や、「どこから攻めればいいのか分かりやすい」という実践参加者の意見から、「意思決定」の複雑さを軽減した教材であると実感できた。また、実践と検討を重ね、より良い教材を再提案することができた。今後の課題は小学校での実践である。

7. 主な参考文献

- 1) 岩田靖(2012) 体育の教材を創る～運動の面白さに誘い込む授業づくりを求めて～, 大修館書店。